

小学校英語教育

—その支援のあり方を考える

新学習指導要領の全面实施により小学5・6年生の英語が教科化されて、今年度で3年目となった。

学級担任を中心として、「聞くこと」「話すこと」の言語活動は広がっているが、
教員や学校によって指導力に差が出てきていることへの課題意識を始めとして、
「読むこと」「書くこと」の指導や、学習評価には戸惑いがあるようだ。

また、小学校段階で学習すべき内容の増加により、

子どもが英語に苦手意識を持つ時期が早まったのではないかと懸念の声も上がっている。

そうした現状において、子どもの英語力を高めるために、教育委員会は学校現場をどう支援していけばよいのか。

小学校英語に関する教員研修を全国で行う有識者の提言や、3つの教育委員会の実践から考える。

学校現場、教育委員会の課題意識

私自身、小学校で英語教育を受けていないので、どのような授業をすればよいか、イメージが持てていなかった。研修に行く時間をなかなか取れず、自分の英語力にも自信がないので、どうしてもALTに頼ってしまう。

(小学校教員)



小学校で英語を教科として学んだ生徒は、以前に比べて、習得している語彙数が多く、コミュニケーションを積極的に取ろうとする姿勢も身につけている。しかし、会話を中心とした学習のためか、文法や書く活動に苦手意識のある生徒が多い。

(中学校教員)



教科担任制が始まって専科教員を配置したが、専科教員に頼りきりになる部分が出てきている。専科教員が全部を担えるわけではないので、担任と専科教員の役割のバランスが課題だ。

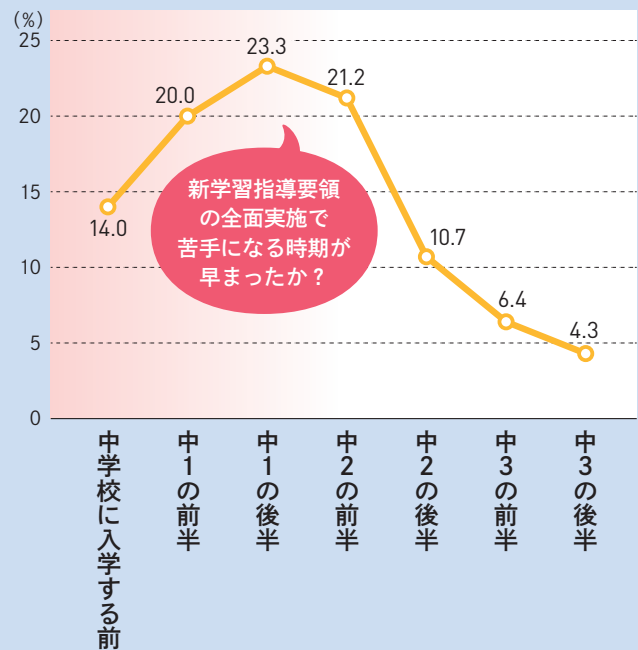
(教育委員会)



※『VIEW next』教育委員会版読者アンケート、ヒアリング等を基に編集部で作成。

英語を苦手と感じるようになった時期

(2017年度中学3年生への調査)



注) 英語の「得意・苦手」について「やや苦手」「とても苦手」と回答した486人のみの回答結果。

※ベネッセ教育総合研究所「中3生の英語学習に関する調査(2015-2018 継続調査)」を基に編集部で作成。